

現代文100字要約ドリル入門編〈第3版〉

# 手 引 き

〔問題編〕

◆本書の構成

このドリルは、文章の〈要約〉力をつけるために編まれた、記述トレーニング用の問題集です。問題文はすべて一〇〇字以内で要約してください。

難易度レベル ★★★…基本

標準

問題用紙の裏の右側には草稿用紙を付けました。下書きその他、自由に使用してください。裏の左側には問題文の続きを印刷されています。続きを読むにあたっては、問題用紙の右側を必要なだけ折り曲げてください。用紙全体を裏返さずに要約文が書けます。

なお、**1**～**23**の上部の開み数字（**1**・**2**…）は段落番号を、**24**～**28**の上部の数字は行数を表します。

別冊の〈解答・解説編〉には、問題文を再掲して文章構成等を図解しました。また〈論旨の構造／場面の展開／着眼点〉、〈要約へのアプローチ〉、〈解答例・配点〉を掲げ、読解における着眼点をチェックするとともに、自分でも答案を探点できるようにしてあります。担当の先生に採点していただくのがベストですが、やむを得ず自分で行う場合は、〈要約へのアプローチ〉の中に記した採点基準や、〈解答例・配点〉に掲げた部分点を十分参考にしてください。

さらに、著者のプロフィールや著書も紹介してありますので、この手がかりに学習の幅を広げてほしいと思います。

ここに収められた三十題に取り組むことで、文章読解力と記述表現力を養い、生き生きと学習していくことを願ってやみません。

◆本書の使い方

原貝 指定の先生の指示に従って使用してください  
なお、自習としてこの教材を使う場合は、以下の要領で取り組んでください。

ます、本文と対照させ、問題文下段にある「論旨の構造／場面の構造／着眼点チエック！」の空欄に語句を補つてください。〈論旨の構造〉〈場面の展開〉は、意味段落ごと、場面ごとの重要事項との関係をまとめたものです。空欄に語句を補うことで、意味段落ごと、場面ごとの内容をしっかりと把握しましょう。

次に、問題文左側の解答用紙を使って全文の〈要約〉に挑戦してください。〈論旨の構造／場面の展開／着眼点〉で把握した内容を確認しながら作業をすすめましょう。

◆ 本書の構成	1 お客様は偉くない ..... 有栖川有栖 1
◆ 本書の使い方	2 遊行の門 ..... 五木寛之 3
◆ 要約についての考え方	3 自由論 ..... 内山節 5
◆ 〈隨筆・論説〉編	4 王朝びとの四季 ..... 西村亨 7
◆ 〈資料の読み取り〉編	5 目を閉じて心開いて ..... 三宮麻由子 9
29 人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方か	6 異文化の根っこ ..... 松本仁一 11
30 「ら抜き言葉」を使うかどうか	7 本を読む。ゆっくり読む。 ..... 長田弘 13
27 星々の悲しみ	8 「ことば」ほどおいしいものはない ..... 山根基世 15
26 夏帽子	9 和の思想 ..... 長谷川櫂 17
25 クラスマエイツ	10 読書の方法 ..... 吉本隆明 19
24 彼と私の本棚	11 いま「戦争」を考える ..... 早乙女勝元 21
23 知の体力	12 「学び」の場はどこにあるのか ..... 汐見稔幸 23
22 情動の哲学入門	13 「論理的」思考のすすめ ..... 石原武政 25
21 図書館化する世界	14 「劇的」とは ..... 木下順二 27
20 日本語の論理	15 哲学の使い方 ..... 蝶田清一 29
19 〈希望〉の心理学	16 疑似科学入門 ..... 香山リカ 33
18 「育てられる者」から「育てる者」へ ..... 鯨岡峻 35	17 貧乏クジ世代 ..... 池内了 31
17 貧乏クジ世代	18 「育てられる者」から「育てる者」へ ..... 鯨岡峻 35
16 疑似科学入門	19 〈希望〉の心理学 ..... 白井利明 37
15 哲学の使い方	20 日本語の論理 ..... 外山滋比古 39
14 「劇的」とは	21 図書館化する世界 ..... 港千尋 41
13 「論理的」思考のすすめ	22 情動の哲学入門 ..... 信原幸弘 43
12 「学び」の場はどこにあるのか	23 知の体力 ..... 永田和宏 45
11 いま「戦争」を考える	24 彼と私の本棚 ..... 角田光代 47
10 読書の方法	25 クラスマエイツ ..... 森絵都 49
9 和の思想	26 夏帽子 ..... 長野まゆみ 51
8 「ことば」ほどおいしいものはない	27 星々の悲しみ ..... 宮本輝 53
7 本を読む。ゆっくり読む。	28 赤蛙 ..... 島木健作 55
6 異文化の根っこ	
5 目を閉じて心開いて	
4 王朝びとの四季	
3 自由論	
2 遊行の門	
1 お客様は偉くない	

が解答用紙に印刷されています。これをヒントに、できるだけ過不足なくマス目を埋めるようにしましょう。

- (3) 最後に、〈解答・解説編〉の「論旨の構造／場面の展開／着眼点」、「要約へのアプローチ」を参考に、自分の読解のあり方を確認し、答案を採点・添削（10点満点）してみましょう。

また、解答用紙にヒントが印刷されていた問題については、裏面の草稿用紙を利用するなどして、もう一度自分の力で要約文を書いてみましょう。

▽わからない言葉が出てきたら辞書で調べ、そのつど覚えていくようにしましょう。

▽しばらく日をおいてから読み直し、もう一度挑戦してみるのも効果的です。前に読んだときと比べて、確実に読解力が深まっていることを実感できるはずです。

――問題文は、さまざまなジャンルから成っています。繰り返し読むことで、テーマ・主題についての理解を深めることも、意義のある復習となるでしょう。

### ◆要約についての考え方

〈要約〉とは、「文章や話の重要な内容を選びとつて、短くまとめるうこと」を意味します。

そして、〈要約〉には、「大意の要約」「要旨（主旨および趣旨）」の要約、それと関連する「題名の提示」といった種類があります。図示すると下記のような関係になります。

論旨とは「論述されている内容およびその筋みち」を意味し、それは〈解答・解説編〉の下段に示してあります。大意はその「論旨」を本文の展開に即して縮小したもののことです。そして、要旨はその「論旨」「大意」のなかの「要となる内容」を指し、本書ではその把握の練習をします。したがって、まずは、

① 筆者が、〈何について＝話題、問題〉どう述べているか＝主張、意見」という核になる部分を読み取ろうと、強く意識して

読んでいかなければなりません。

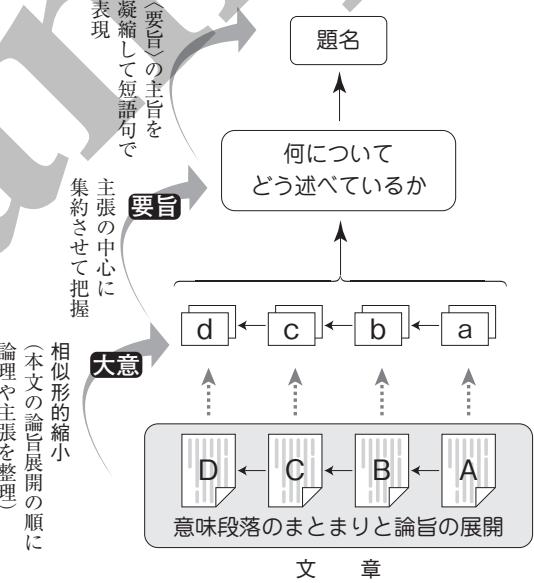
と同時に、筆者は、思いついたことを思いついたままにただ書き連ねていてはありませんから、  
② 筆者が、①について述べるにあたって、〈どのように話の筋つまり論理を展開させていているのか〉ということにも自覚的になる必要があります。

つまりは、①「筆者のイイタイイコト」と②「論旨展開の構造」という、この二点の把握が重要だということです。

入試現代文の問題文のほとんどは、長い文章の中のある特定の「まとまりのある一部分」を抜いて作られています。したがってそこには、〈序論・本論・結論〉〈起・承・転・結〉といった構成が見える場合もあり、それも〈要約〉の手がかりになるでしょう。しかし、全ての文章がそうした定まった構成をとるとは限りませんので、先の①と②の把握が最重要となるわけです。

小説の場合は、場面のまとまりを意識しながら、その展開を押さえ、〈ストーリー・あらすじ〉をとらえるとともに、話の山場となる〈心情〉を把握し、〈あらすじ〉+〈テーマ〉という形で、どんな話なのかが明確になるよう、まとめていきましょう。

資料の読み取りの場合は、まずは①「顕著な傾向として表れている事柄に注目」し、②「細部に表れている事柄にも着目」していくという順序でデータを整理していきましょう。〈考え方〉を要求されているときは、データから客観的に読み取れる範囲で普遍妥当的な意見を添えていきましょう。





肢は石の小さな溝みに取りついたが、すぐにつるつと引つ繰り返つて紅い斑点のある黄色な腹を空しくもがいた。私は何か長い棒のようなものを差し伸べてやりたかったが、そんなものはあたりには見あたらなかつた。今はただじつとその（注4）帰趨を見守つてゐるばかりである。

やがて赤蛙は最後の飛びつきらしいものを石の窪みに向かって試みた。そうしてくるとひっくりかえると黄色い腹を上にしたまま、何の抵抗らしいものも示さずに、むしろ静かに、すーと消えるようなおもむきで、渦巻のなかに呑みこまれていった。私は流れに沿うて小走りに走つた。赤蛙が再び浮くかも知れぬ川面のあたりに眼をこらした。しかし彼は今度はもう二度と浮き上がつてはこなかつた。

私はあたりが急に死んだように静かになつたのを感じた。事実にわかに薄暗くなつてもきていた。私は歩きながらさつきからることを考えつづけた。秋の夕べ、不可解な格闘を演じたあげく、精魂尽きて波間に没し去つた赤蛙の運命は、滑稽というよりは悲劇的なものに思えた。彼を駆り立てていたあの執念の原動力は一体何であつたのだろう。それは依然わからぬ。わかる筈もない。しかし私には本能的な生の衝動以上のものがあるとしか思えなかつた。活動にはいる前にじつとうずくまつていた姿、急流に（注5）無二無三に突っ込んでいった姿、洲の端につかまつてほつとしていた姿、——すべてそこには表情があつた。心理さえあつた。それらは人間の場合のようにこつちに伝わつてきた。明確な目的意志にもとづいて行動しているものからでなくてはあの感じは來ない。ましてや、あの波間に没し去つた最後の瞬間に至つては。そこには刀折れ、矢尽きた感じがあつた。力の限りに戦つて来、最後に運命に従順なものの姿があつた。そういうものだけが持つ静けささえあつた。馬とか犬とか猫とかいうような人間生活のなかにいるああいつた動物ではないのだ。蛙なのだ。蛙からさえこの感じが来る、といふこの事実が私を強く打つた。

**(注1)** 小野道風が、柳の枝に飛びつくことに成功した雨蛙を見て、自分の努力不足を

反省し、書道の達人になつたという伝承。

(注2) 五間 || 約九メートル

(注5) 無二無三——一心不亂

時々彼の前髪は石の  
取り立たがすぐによると引つ繰り返つて、  
もがいた

に向かつて試みた

黄色い腹を  
まま

何の  
も示さずに

のなかこ呑みこまれていった  
で

←  
は

場面3

秋のタベ、  
岐間ご殿  
を演じたあげく

は、滑稽というよりは、

←  
以上のものがある

← としか思えなかつた

明確な  
にもとづいて

あの感じは来ない  
—「ミントー」

波間に没し去った

最後に  
の姿があつた

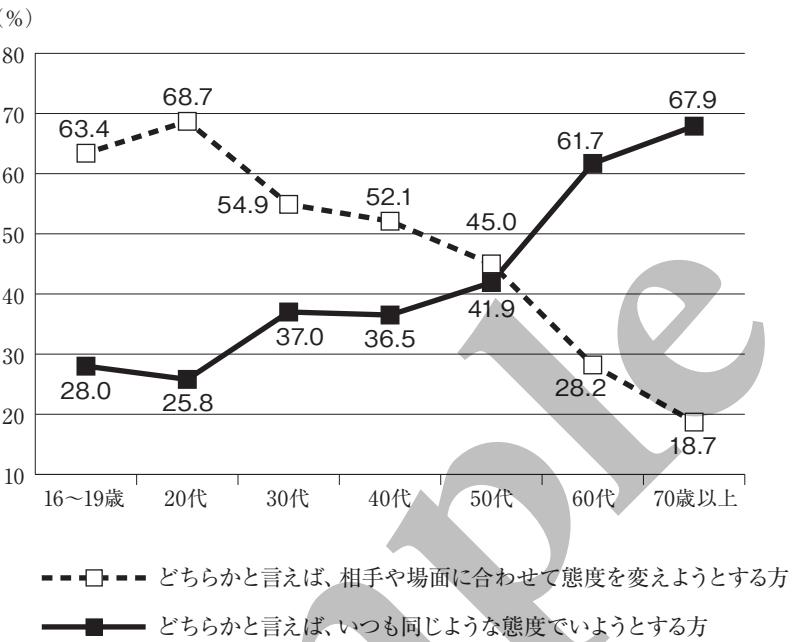
そういうものだけが持つ

この感じが来る、

という事実が私を強く打った

次の図表は、文化庁が行った「国語に関する世論調査」において、「コミュニケーションのあり方に關し「人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方か」と質問したときの、回答結果の一部をグラフとして示したものである。

「どちらかと言えば、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方」をA、「どちらかと言えば、いつも同じような態度でいようとする方」をBとし、図表から気づくことを、あなたの考えを含めて一〇〇字以内でまとめなさい。なお、合計が一〇〇パーセントになつていなければ、「どちらとも言えない」「わからない」と回答した者もいたからである。



(文化庁「平成 25 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」から作成)

- 資料を確認して、  
(1) 頗著な傾向として表れている事柄に注目する  
(2) 細部に表れている事柄にも着目していく  
という手順で読み取っていこう。

- (1) の観点から、  
□が右肩下がりで、□が右肩上がりで  
あること  
AとBが□代を境に□していること  
に気づくはず。

- だが、それだけにとどまらず、(2)の観点からも見ていくようにしよう。  
Aの最高値が□代であり、Bの最低値もまた□代であること  
に気づけるかどうかがポイント。  
設問は「あなたの考え方を含めて一〇〇字以内」でまとめることを要求しているので、右の読み取りについて「あなたの考え方」を示さなければならない。  
□が右肩下がりで、□が右肩上がりで  
あること  
AとBが□代を境に□していること

- にはどんな意味があるのか、それを自分なりに考えてみよう。年代が上がると頑固になる、保守的になるなどいろいろ考えられるであろうが、「頑固」「保守」と決めつけてしまつてよいものか。より包括的な表現でまとめていくのがよいであろう。

- また、  
Aの最高値が□代であり、Bの最低値もまた□代であること  
には、どんな意味があるのだろうか。  
□の数値が高く、□の数値が低いことから言えそうなことを考えてみよう。

る。	A	は
。	は	は
値	に	は
に	次	は
次	第	は
第	に	は
に	代	は
代	を	は
若	ピ	は
者	ー	は
が	ク	は
し	に	は
、	両	は
両	者	は
者	は	は
代	は	は
を	は	は
代	が	は
を	、	は
境	に	は
に	B	は
B	は	は
は	代	は
代	を	は
を	境	は
境	に	は
に	か	は
か	け	は
け	、	は
、	代	は
代	を	は

病の静養のため伊豆の温泉宿に滞在していた「私」は、ある日、道端の川の中洲に一匹の赤蛙を見つけた。赤蛙は中洲から急流を泳いで向こう岸に渡ろうとしていた。

**赤蛙は依然として同じことを繰り返している。**はじめのうちは「これで六回、これで七回」などと面白がつて数えていた私は、そのうち数えることもやめてしまった。川の面の日射しがかげり出す頃からは赤蛙の行動は何か必死な様相をさえも帶びてきた。再び取りかかる前的小休止の時間も段々短くなっていくようだつた。一度はもうちょっとの所で向こう岸にない。それからは目に見えて力もなく脆く押し流されてしまうように見えた。坂を下る車の調子で力が尽きていくように見えた。

吹く風にもわかに冷たくなってきたし、私は諦めて立ち上がった。道風の雨蛙は飛びつくことに成功したがこの赤蛙はだめだらう……私は立つて裾のあたりを払つた。もう一度、最後に、川の面に眼をやつた。

私は思わず眼を見張つた。ほんのその数瞬の間に赤蛙は見えなくなつてしまつていた。私はまた中洲の突端に取りついて浮かび上がる彼の姿を待つてたが、今度はいつまでたつても現れなかつた。遂に成功して向こう岸にたどりついたのだとはどうしても思えなかつた。私は未練らしく川のあちらこちらを何度も眺め廻したあとでどうとうそこを立ち去つてしまつた。

しかし川に沿うて下つて、まだ五間と行かぬうちに、思いもかけぬところで再び彼と逢つたのである。  
今度はすぐ眼の下、こっち岸に近いところだつた。そこは水も深く大石が幾つもならんでいて、激して泡立つた流れの余勢が、石と石との間で蕩搖したり渦を作つたりしていく。そしてそういう石陰の深みの一つに赤蛙は落ち込んでいるのだつた。こうなつた順序は明らかだつた。押し流される毎に中洲の突端にすがりついていた彼は、もうその力もなくなつて流されるがままになつたのだ。洲をはさんで一つに合した水の流れは大きく強くなつて、煽るような勢いで、こっち岸へ叩きつけてよこしたのだ。事態は赤蛙にとつて、悲惨なことになつてしまつてた。彼は蕩揺する波に全く翻弄されつゝある。辛うじて浮いているに過ぎぬようだが、それが彼の必死の姿であることは、彼の浮いている石陰のすぐ近くには渦巻があつて、絶えずそこへ彼を引きずり込もうとしていることからわかるのだつた。彼に残された活路はたつた一つきりだつた。石に這い上がることである。だが、その石の面たるや殆ど直立していて、その上に水垢でてらてらに滑つくなつてているのだ。長い後肢も水中では跳躍力もきかず、無力に伸ばしたりかがめたりするのみだつた。時々彼の前肢は石の小さな窪みに取りついたが、すぐにくるつと引つ繰り返つて紅い斑点のある黄色な腹を空しくもがいた。私は何か長い棒のようなものを差し伸べてやりたかつたが、そんなものはあたりには見あたらなかつた。今はただじつとその帰趣を見守つてゐるばかりである。

やがて赤蛙は最後の飛びつきらしいものを石の窪みに向かつて試みた。そうしてくるつとひっくりかえると黄色い腹を上にしたまま、何の抵抗らしいものも示さずに、むしろ静かに、すーと消えるようなおもむきである。小走りに走つた。赤蛙が再び浮くかも知れぬ川面のあたりに眼をこらした。しかし彼は今度はもう一度と浮き上がつてはこなかつた。

私はあたりが急に死んだように静かになつたのを感じた。事実にわかに薄暗くなつてもさっていた。私は歩きながらさつきからのことを考えつづけた。秋の夕べ、不可解な格闘を演じたあげく、精魂尽きて波間に没し去つた赤蛙の運命は、滑稽というよりは悲劇的なものに思えた。

## &lt;川の向こう岸へ渡ろうとする赤蛙&gt;

**場面1 川の向こう岸へ渡ろうとする赤蛙（15行目）**

赤蛙は依然として同じことを繰り返している。  
赤蛙の行動は何か必死な様相をさえも帶びてきた  
小休止の時間も段々短くなつていくようだつた  
一度はもうちょっとの所で向こう岸に立つたかも知れない  
力が尽きていくように見えた  
力もなく脆く押し流されてしまつた  
赤蛙は見えなくなつてしまつてた  
川のあちらこちらを何度も眺め廻してしまつた  
どうとうそこを立ち去つた

**場面2 流れに呑みこまれていった赤蛙（16行目）**

思ひもかけぬところで再び彼と逢つた  
水も深く大石が幾つもならんでいて、激して泡立つた流れの余勢が石と石との間で蕩搖したり渦を作つたりしてた  
そういう石陰の深みの一つに赤蛙は落ち込んでいた  
事態は赤蛙にとつて、悲惨なことになつてしまつてた  
やがて赤蛙は最後の飛びつきらしいものを石の窪みに向かつて試みた  
そうしてくるつとひっくりかえると、黄色い腹を上にしたまま  
何の抵抗らしいものも示さずにむしろ静かに、すーと消えるようなおもむきである  
満巣のなかに呑みこまれていった  
彼は今度はもう二度と浮き上がりはこなかつた

## 場面の展開

**場面3 赤蛙に対する「私」の思い（39行目）**

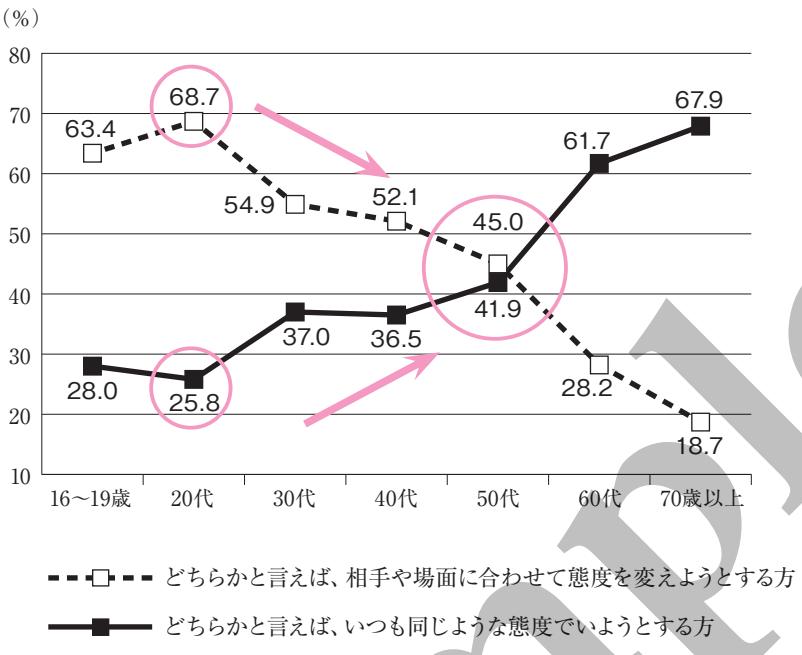
秋の夕べ、不可解な格闘を演じたあげく精魂尽きて波間に没し去つた赤蛙の運命は、滑稽というよりは悲劇的なものに思えた



## 人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方か

次の図表は、文化庁が行った「国語に関する世論調査」において、コミュニケーションのあり方に關し「人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方か」と質問したときの、回答結果の一部をグラフとして示したものである。

「どちらかと言えば、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方」をA、「どちらかと言えば、いつも同じような態度でいようとする方」をBとし、図表から気づくことを、あなたの考えを含めて「〇〇字以内でまとめなさい。なお、合計が「〇〇パーセントになつていはないのは、「どちらとも言えない」「わからない」と回答した者もいたからである。



(文化庁「平成 25 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」から作成)

### 着眼点

資料を確認して、  
著的な傾向として表れている事柄に注目する

(1) 細部に表れている事柄にも着目していく

という手順で読み取っていこう。

(1) の観点から、

A が右肩下がりで、B が右肩上がりで

あること

A と B が 五〇 代を境に逆転している

こと

に気づくはず。

だが、それだけにとどまらず、(2)の観点からも見ていくようにしよう。

A の最高値が二〇代であること

最低値もまた二〇代であること

に気づけるかどうかがポイント。

設問は「あなたの考え方を含めて「〇〇字以内」でまとめるなどを要求しているので、右の読み取りについて「あなたの考え方」を示さなければならぬ。

**A** が右肩下がりで、**B** が右肩上がりであること

A と B が 五〇 代を境に逆転していること

にはどんな意味があるのか、それを自分なりに考えてみよう。年代が上がると頑固になる、保守的になるなどいろいろ考えられるであろうが、「頑固」「保守」と決めつけてしまってよいものか。より包括的な表現でまとめていくのがよいであろう。

また

**A** の最高値が二〇代であり、**B** の最低値もまた二〇代であること

には、どんな意味があるのだろうか。

**A** の数値が高く、**B** の数値が低いことから言えそうなことを考えてみよう。

要約へのアプローチ

つては、とんでもない人が何を答へたのかが回答者にな  
っているわけではないということは意識しておこう。アンケートの  
対象母胎がどんな人たちから成るのかが、当然問題視されることに  
なる。それゆえ、アンケートの対象母胎によつては結果としてのデ  
ータ、数値には偏差が生じ、それに違和感を抱く人も出てくるとい  
うことになる。とはいっても、アンケートの対象母胎が広範化すれば、  
それなりの平均値が示されることもまた事実であろう。そんな前提  
に立つて、データ資料に接していくようしよう。

「おお、いいおも同じ。」おお、おお、おおと喜んでいた。「おお、おお、おお」と喜んでいた。

・さらに、両者が五〇代を境に逆転していることの一点であろう。したがって、この一点には必ず触れる必要がある。この変化に「あなたの考え方」（設問の要求）として意味を与えるとしたら、「年代が上がるほど、自分の考え方方が固定的になり、それを譲らない傾向がある」といったことが言えるであろう。

だが、それだけで満足せず、Aの折れ線のピークが二〇代になつ

ていること、またBの最低値も二〇代になつてゐることにも着目しへ。つまり、この二つの音階は、『日三・月四』の二十二三

たい  
まり  
二〇代の若者かいたばん  
「相手や場面」のことを  
気にしてそれに合わせようとしている」ということである。その点

にも言及する形でまとめていきたい。

\*① 要約するにあたっては、Aが年代ごとに下降線を描き、Bが上昇線を描いていること

(二) 二十點二分

\*  
② そして、AとBが五〇代で逆転していることを指摘するとともに、  
……  
②点

③ A・Bとともに、二〇代の数値に特徴があることに触れ、

（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）

＊(4) ①および②の意味づけとして、年齢が上がるほど、自らの立場や考え方を堅持しようとすること……2点

⑤ ③の意味づけとして、二〇代の若者が「相手や場面」に合わ

せようとしていることは言及する  
という方向で考えていけばよいであろう。（＊は必須要素）  
……2点

この場合、顕著な事柄としての①・②に触れ、それに対する考え方

方として④に関連した言及が必須となるので、それらの意味あいが全く出ていないものは、全体が0点となる。

〇代を  
点分

二  
二  
一

か  
ナ  
、

ノイズの影響

卷之三

Aは二〇代をピークに下降線をたどるが、Bは二〇代を	(3) 点分
最低値に次第に上昇し、両者は五〇代を境に逆転してい	(3) 点分
る。	(3) 点分
④ 2点分	
二〇代の若者が対人関係や場の雰囲気を気にかけ、	(3) 点分
年代が上がるほど自らの立場を堅持すると考えられる。	(3) 点分

(1) まずは、顕著な傾向として表れている事柄に注目する  
そののち、細部に表れている事柄にも着目していく  
ということを心がけよう。一〇〇字以内でまとめることが要求されているので、どこまで言及できるか制約があるが、できるだけ右の(1)・(2)の考え方即して忠実に考えていく。  
まず、図表から顕著にうかがえることは、

(2) ①および②の意味づけとして、年代が上がるほど自らの立場や考え方を堅持しようとするこ<sup>…2点</sup>  
③の意味づけとして、二〇代の若者が「相手や場面」に合わせようとしていることに言及する<sup>…2点</sup>

この場合、顕著な事柄としての①・②に触れ、それに対する考え方として④に関連した言及が必須となるので、それらの意味あいが全く出ていないものは、全体が0点となる。